

医療ルネサンス No.4857

平穩死を考える ② / 5



医師と協力し、特別養護老人ホームでの看取りに積極的に取り組んでいる小西さん（高浜安立荘で）

入院やめホームで看取る

愛知県高浜市の特別養護老人ホーム「高浜安立荘」では、亡くなった入所者を正面玄関からスタッフがお見送りする。ホームでの死は「ついの住み家」の役割を果たした証として、まったく隠さない。「私もあんなふう」。そう話す入所者もいる。

2006年度に同市内の開業医、石川亨さんが嘱託

医になってから、ホームで看取る人数は年間十数人と、以前の2〜3倍に増えた。

同ホーム業務課長の看護師、小西由香里さんによると、以前は、肺炎になった入所者はすぐ病院に運ばれていた。しかし、環境の激変で混乱したり、点滴のためベッドから動けず気力を失ったりと、そのまま帰っ

て来ない人も多かった。

病院勤務だった石川さんは2002年に開業後、地域で患者や家族の人生を見つめる中で、医療の役割を考え直した。「入院させれば、死を先送りできるかもしれない。しかし、患者にとって決して快適でない状態を長引かせるのはどうか」と話す。

以前の嘱託医は、隣の市

の病院勤務医で、こまめな対応は望めなかった。今は何かあれば、入所者を石川さんの医院に連れていって診てもらえるし、いざという時には駆けつけてくれる。

家族と話し合う機会も持てるようになった。本人の状態を石川さんに診断してもらい、職員からは、ホームでは最期まで入浴できるし仲間や職員に囲まれて過ごせることなど、入院との違いを説明する。こういっ

た取り組みのおかげで、安易な入院が減った。

同ホームではまた、「最後は家に連れ帰ってあげたい」と望む家族の願いにも対応する。5年間入所していた96歳の認知症の女性は2009年7月、同市内の自宅で家族に看取られた。

不動産業を営む息子(71)は毎日、朝昼晩とホームに来て食事を介助した。飲み込む力をほとんど失っても、時間をかけて食べ物を口に運んだ。何度も肺炎による入院治療を繰り返したが、最後に肺炎を起こした際は、家族、職員、石川さんらで話し合い「これ以上は、かわいそう」と入院治療をすることはやめた。

「電話をくれれば、すぐに行く」という石川さんの言葉に安心し、息子は自宅での看取りを決意した。家に帰って4日目の朝、女性は安らかに息をひきとった。「ホームに支えられて、自分かやれるだけはよかった。まったく悔いがない」と息子は振り返る。